

【解説】

第1問 メディアの歴史

A

エジプトとオリエントの風土の違いは、政治状況にも影響するため知っておいてよい。P. 68, 69 でイメージを高めておこう。

問1 正解② (エジプトの歴史) 1

アラブ人の征服とは、イスラーム世界の拡大を指すから、いちばん遅いのは明らか。ちなみに、P. 122 2 の年表と P. 123 の地図 B を見れば、ムハンマドの死後わずか20年で、エジプトを席卷していることがわかる。ニハーヴァンドの戦いとほぼ同時であることも確認できる。

また、P. 82 でヘレニズム世界の変遷を地図で追えば、アレクサンドロス帝国の崩壊後にプトレマイオス朝が成立している(もちろん後で滅亡する)のがわかる。このページは、ギリシア的要素の影響した範囲、特にガンダーラ美術の成立に至る過程を、視覚的に知る上でも重要。

問2 正解② (古代ローマにおける土地経営) 2

P. 91 4 を見て、土地経営の変化を確認するとともに、政治的側面との関わりも考えておけば、同様のテーマで論述問題が出ても対応できる。

ラティフンディアの成立は共和政ローマの転換点にあたり、ポエニ戦争と深く関係している。その様子は、P. 89 4 に図示されている。

また、コロヌスの身分が固定化され、ローマが「自由社会」の要素を失っていくのはコンスタンティヌス帝の時代であり、これは P. 90 1 で確認したい。さらに、コロナトゥスが、中世荘園制の起源の一つであることも、P. 137 の 3 で確認できる。

問3 正解① (2世紀に存在した書物) 3

手紙が2世紀のものであることは、落ち着いてリード文で確認しておく。

①アウグスティヌスについては P. 95 を参照。主著『神の国』で「地上の国」との対

比を思考しているが、その背景には、弱体化するローマ帝国の現実があった。彼が教父とよばれることは、ローマ帝国でキリスト教が公認され、正統信仰が確立しつつあった4世紀以降の人物であることを示す。各宗派の分離過程についてもP. 95に図示されている。

②ヘロドトスとトゥキディデスの『歴史』の対比は、政治史との関係で成立順序も重要。P. 84の一覧表で確認。

③ホメロスの叙事詩に描かれているのは、ポリス成立以前のギリシアの様子。これに刺激を受けたシュリーマンが、発掘で大きな成果をあげた。P. 78の人物コラム参照。

④ポリビオスは政体循環史観に立って、元老院・民会・コンスルがバランスをとったローマの共和政を描いた。ローマ文化の中でギリシア人の活躍は大きな要素であり、ポリビオスもその一人。P. 92の一覧で確認したい。

B

問 4 正解③ (16 世紀の社会・経済) 4

- ①大航海時代に起こった，ヨーロッパおよびアメリカ大陸の変化については P. 183 と P. 186 に詳しい。東欧が西欧への食料輸出地域となり，グーツヘルシャフトの発展が見られたことは，P. 183 の 3 で確認できる。西欧を「中核」とみなす世界システム論によれば，東欧はアメリカ大陸とともに「周辺」となる。なお，グーツヘルシャフトの成立は，プロイセンで大きな権力を持ったユンカーにつながっていく。P. 202 の用語解説を参照したい。
- ②第 1 次囲い込みについては，まず P. 198 2 を見て，ヘンリ 8 世時代に注目してほしい。囲い込み批判で有名なトマス=モアが，同時代の人物であることも確認できる。また，囲い込みに関わったジェントリの特質については，P. 199 の 4 に用語解説があるので見ておきたい。
- ③価格革命の原因は銀の流入のみではないが，P. 183 の 3 を参照。

問 5 正解④ (伝達の技術や道具) 5

両文とも P. 112 のコラムの地図で確認できる。グーテンベルクは P. 193 にも掲載されている。

問 6 正解⑤ (17 世紀のイギリスの出来事) 6

一つのテーマに関する事項を並べ替える問題としては，オーソドックスなもの。P. 205 で確認していきたい。

年表を見ると，ステュアート朝全体がイギリス革命，さらにスコットランドと深く関わっていることがわかる。例えば，ジェームズ 1 世は，スコットランド王からイギリス王を兼ねるが，議会との対立を招く。次のチャールズ 1 世の時代にスコットランドの反乱が起き，いわゆる短期議会の召集に至る。クロムウェルは王党派の勢力を削ぐため，アイルランドのみならずスコットランドにも遠征している。名誉革命後のアン女王の時代には，そのスコットランドとイギリスが合同する，という次第だ。

革命に関わる法制で言えば，権利の請願と航海法のほかに，チャールズ 2 世時代

の審査法・人身保護法，ウィリアム 3 世・メアリ 2 世時代の権利の宣言・権利の章典なども時期を問われる可能性がある。あわせて確認しよう。

C

問7 正解① (メディアの歴史) 7

P. 241 に載っている科学や技術の進歩は、現代生活につながるものが多いだけに無視できない。常識的な範囲はおさえたいところ。

③このような様々な科学技術の集大成の一つがラジオ・テレビだが、いずれも 1920 年代のアメリカが実用化に大きな役割を果たした。P. 270, 271 を中心に、今とは違った意味で超大国であったアメリカの様子をイメージしてほしい。ラジオ放送を使って「説明責任」を果たしたフランクリン＝ローズヴェルトのことも P. 276 に掲載されている。

④インターネットの普及は、グローバリゼーションを象徴するという意味で、既に世界史の一部を構成する。P. 292 11 などを見て、冷戦後のグローバル化の波を、少しでも追いかけておこう。

問8 正解③ (歴史上のスローガン・理念・主張) 8

①アメリカの領土拡大過程は頻出事項。P. 234 の年表と地図をよく確認したい。買収にせよ、戦争でもぎ取ったにせよ、先住民を無視した側面があるのは事実。ジャクソン大統領のように、強制移住というあからさまな方策が出る一方で、マニフェスト＝デスティニーという美辞麗句も使用されるようになった。

②インドの反英運動については、P. 273 に詳しい。国民会議派の動きをカルカッタ大会やラホール大会に注目して整理する一方、ガンディー・ネルー・ジンナーの路線の違いを把握すれば、第二次世界大戦後のインドも理解しやすくなる。

③19 世紀の中国の変化については、P. 248 の年表を参照したい。太平天国の滅満興漢と義和団の扶清滅洋の対比もできる。同じ年表で、一連の条約によって、中華帝国の朝貢体制が崩壊していく順序も整理できる。また、19 世紀の中国でもう一つ対比されやすい、洋務運動と変法運動に関しては、P. 251 の表がわかりやすい。

④戦後史学習までは時間が割けない受験生も多いだろう。しかし、冷戦とその終結など、常識的事項は優先的にやっておきたいところ。P. 284～293 を使えば、一通りの概観が可能なので利用してほしい。ソ連の行き詰まりについては、P. 291 の 5 を参照。

問 9 正解② (アジア・アフリカでの列強の勢力拡大) 9

- ①イランの状況は P. 242 1 と P. 243 を参照。タバコ=ボイコット運動は反英運動的側面が強いが、立憲革命は、列強に対抗できないカージャール朝政府に向けられる。
- ②③アフリカの植民地化については、P. 257 の地図を中心に基本事項を整理するのが第一。
- ④インドの植民地化については P. 244 の 1 を参照。イギリスの植民地拡大過程における諸戦争の順序、東インド会社の役割の変化、シパーヒーの反乱の結果としての同会社の解散(直轄支配)など、重要なポイントが満載である。

第2問 世界史上の宗教

A

この内容は、図表 P. 186 の **2** と密接に関係している。

問1 正解③ (宗教) **10**

a マニ教はゾロアスター教との対比でよく出てくる。P. 77 の **3** 参照。両宗教は、地理的には中国まで伝播し、長安にその寺院がつくられていた。P. 118 の **1** などを見ておきたい。また、その伝播の過程で、ソグド人・ウイグル人の活動が浮かび上がる。さらには、ゾロアスター教のユダヤ教・キリスト教への教義的影響も忘れてはならない。

b P. 141 の **5** 参照。この出来事が、ロシアの正教化の基礎であることを考えれば、極めて重要である。

問2 正解① (カリブ海地域とアメリカ大陸) **11**

大航海時代については、P. 183 の地図で航路を確認することも必要だが、P. 182 の **1** で、各事象の意味や順序を考えることも重要である。

例えば、イサベル女王のもとでコロンブスがサンサルバドル島に到達し、同じ頃、バルトロメウ=ディアスが喜望峰に達する。これで、スペインの西回り航路開拓、ポルトガルの東回り航路開拓が明確化し、一種の縄張りとしてトルデシリャス条約が結ばれる。勘違いしやすいのは、カブラルのブラジル漂着。これは同条約より後なので確認しておきたい。

また、コロンブスがインド(アジア)と誤解した大陸が、後に、ヨーロッパ人にとって未知の大陸と認識され、アメリカと名付けられたことも年表から確認できる。スペインがめざすのはアジアの香辛料であるから、当然、アメリカ大陸の先にある本当のアジアを探さなければならない。その流れで、バルボアのパナマ地峡横断、カルロス1世治下のマゼラン一行世界周航の時期を理解したい。

問3 正解④ (16世紀後半の出来事) **12**

①③16世紀の前半は、イタリア戦争の時代であり、これに関わったカルロス1世・

ヘンリ 8 世・フランソワ 1 世が並び立つ。カルロス 1 世は神聖ローマ皇帝としてはカール 5 世であり、彼はルター派の登場に大いに悩まされた。一方、ヘンリ 8 世は自身の離婚問題から、カトリックからの離反をはかる。つまり、16 世紀前半は宗教改革の時代でもあるわけだ。こうしたことから①③の文が時代的にずれているのは明白。

②中国を支配する王朝の交替とともに、周辺諸国に変動が起こるパターンは多い。

13 世紀と 15 世紀の全体地図 (P. 39, 43) を見て、元から明への交替と、高麗から朝鮮への交替がリンクしていることに注目したい。また、前期倭寇も、モンゴル帝国の統制が無くなったことを示す重要事項。

④P. 201 参照。16 世紀後半は宗教改革の影響から、オランダの独立戦争とフランスのユグノー戦争が大事件。後者を収束させたのがアンリ 4 世である。

B

問 4 正解③ (科学者や知識人) 13

受験生の苦手とする文化史の問題であるが、①②③は基本事項であり、P. 84, 188, 241 に記載されている。

④は少し異質。P. 313 を見てほしい。キューバ危機以降、米ソ間を中心に、核軍縮に向けた諸条約が結ばれ、「増加の制限」から「削減」にかじが切られることを確認したい。また、それに先駆けて、第五福竜丸事件の後、原水爆禁止世界大会・国際原子力機関 (I A E A) 設立・パグウォッシュ会議など、各国政府の枠組みをこえた動きがあることを忘れてはならない。

問 5 正解④ (キリスト教徒) 14

①クローヴィスのアタナシウス派改宗は、後のフランク王国発展の礎となった。

P. 135 参照。

②サンバルテルミの虐殺は、ユグノーの殺戮事件。P. 201 に記載されている。ユグノーとカトリックの対立は激しく、アンリ 4 世も複雑な解決方法を迫られた。

③明・清代に活躍するイエズス会宣教師については、P. 173 の 3 のように整理することが必須。モンゴル帝国に来訪するのはフランチェスコ会の修道士が多く、P. 165 2 のように整理しておきたい。

④メイフラワー号でアメリカに渡ったピルグリム=ファーザーズについては、P. 216 参照。

問 6 正解⑤ (アメリカ合衆国の対外政策) 15

P. 234 の 1 参照。アメリカの領土拡大は 1783 年に、ミシシッピ川以東のルイジアナをイギリスから得たことに始まる。年表にあるように、領土拡大に伴う開拓も進展し、1890 年にはフロンティアの消滅が宣言された。この間ほぼ 1 世紀であるが、大きな転換点は二つある。一つは、アメリカ=メキシコ戦争とオレゴン併合であり、太平洋岸に領土が到達する。もう一つは南北戦争で、これ以降、アメリカは本格的な産業革命に突入し、世界最大の工業国にのし上がる。大陸横断鉄道開通やアメリカ労働総同盟 (A F L) の結成が南北戦争後の出来事である点が、象徴的といえるだ

ろう。

なお、門戸開放通牒は、フロンティアが消滅し帝国主義的な進出をめざすアメリカを明示するものであり、時期的には遅い。

C

問7 正解① (仏教) 16

- ①P. 119 のコラム参照。法顕・玄奘・義浄はよく問われる。義浄はシュリーヴィジャヤの繁栄を見聞したことでも問われやすいため、海路利用であることも確認しておきたい(P. 27, 103 参照)。
- ②ガンダーラ美術の起源については P. 84 の3を参照。このヘレニズム風の美術はやがて、純インド風のグプタ様式に変化していくが、この対比も重要。P. 99 の3がわかりやすい。
- ③大乘とは、自分自身だけでなく「衆生」とともに救われることをめざす。つまり、大きな乗り物である。この革新的グループの人々は、自身の解脱に重点を置く保守的グループを、差別的に小乗とよんだ。P. 99 の4を見ると、その流れや後の伝播の様子も確認しやすい。
- ④トプカプ宮殿はボスフォラス海峡を見下ろす岬にある、オスマン帝国歴代スルタンの居城。P. 177 の写真を参照。チベットに建造されたポタラ宮殿は大変印象深い建築物で、P. 171 に写真が掲載されている。

問8 正解③ (中国の社会や経済) 17

宋代の小都市は鎮とよばれる。P. 154 のチェックで確認しておこう。宋代に社会の様々な側面で大きな影響力を持った新興地主層は、場合によって形勢戸とか士大夫ともよばれる。明代では、郷里に居住する実力者を郷紳とよぶが、都市・農村の経済発展を背景に力を握っていた点では、形勢戸・士大夫と類似する。後見返しの「中国史のまとめ」で中国社会の支配層の変遷について解説しているので、この機会に確認しておこう。

中国の歴史を見ると、ともすれば皇帝ごとの政治的業績にのみ注目しがちであるが、社会経済の連続的発展も重要である。P. 154, 172 のような経済史的ページや、巻末のまとめなども活用してほしい。

問9 正解③ (東アジアにおける宗教と政治権力との緊張関係) 18

- ①中国への仏教伝来は、P. 99 の4にあるように1世紀(紀元前後)であり、P. 112 の

一覧でも確認できる。

- ②P. 173 の⑨の写真が象徴するように、イエズス会士の多くは布教活動のみならず、天文学・地理学などを中国にもたらし、多くの学者を育てた。特に『幾何原本』の翻訳はマテオ=リッチと徐光啓の功績として名高い。中国が国家として、キリスト教布教を全面的に禁ずるのは、清代の雍正帝時代。
- ③中国史の重要な場面には、農民反乱が絡んでいることが多い。後見返しの「中国王朝の変遷」にまとめられているので、一度整理してみよう。
- ④前漢の武帝は治世も長く、その業績を整理・記憶することは必須。P. 110 の¹やP. 111 の⁴を利用したい。この頃、ローマはグラックス兄弟の改革から内乱の1世紀に向かう時代である。紀元前2世紀は、横の関係を問われることも多いので、P. 12 の概観年表と「前2～前1世紀の概観」が役に立つ。

第3問 世界史上の暦

A

問1 正解④ (ユダヤ教徒やユダヤ系の人々) 19

- ①P. 95 を参照。キリスト教の成立した過程から考えて、キリスト教徒にとって『旧約聖書』は聖典であるが、逆は成り立たない。
- ②パレスチナ問題に関する資料は、P. 302, 303 が充実している。戦後の紛争をすべて網羅的に学習するのは難しいが、ここは外せないポイントである。
- ③④P. 277 を見ながら確認したい。バルフォア宣言とシオニズム運動の結果といえる、イスラエル建国は、アラブ諸国の反発を招き、第1次中東戦争へとつながった。

問2 正解② (ヒジュラ) 20

622 年のヒジュラについては、P. 122 の2を参照。イスラーム史には独特の考え方や用語が登場する。イスラーム世界を理解するうえで欠かせない、各種用語の意味や商業活動との結びつきについては、P. 124, 125 も参考になる。

問3 正解② (世界史上の税務・財政) 21

- ①戦間期を見る場合は、世界恐慌以前と以後に分けるのが得策だろう。「以前」のヨーロッパをまとめた P. 268 の1の最下段に登場する第2次マクドナルド内閣は、世界恐慌対策を打ち出した政権である。
- ②ベトナム戦争の経過や、アメリカの戦死者・戦費については、P. 299 に詳しい。国内の反戦運動も高まりを見せたため、ニクソン大統領は「名誉ある撤退」を決断し、デタント外交を展開した。ニクソン訪中などを含めた動向を P. 290 の2で確認したい。
- ③中国の税制の変遷は頻出であり、租庸調制から両税法への動きも重要である。一条鞭法と地丁銀制の違いも重要であり、P. 172 に比較表がある。
- ④P. 245 にザミンダーリー制とライヤットワーリー制についての説明がある。ザミンダールはムガル帝国の統治機構でも、要の役割を果たしていて、P. 181 の2の

図を見るとわかりやすい。

B

問 4 正解② (暦) 22

P. 65 を参照。時間を支配することは権力の表れでもあり、同時に宗教的要素と結びついていることが多い。太陰太陽暦という用語は耳慣れないかもしれないが、P. 65 の¹にあるように、日本の旧暦はこれに該当する。閏月を挿入しており、純粋な太陰暦ではない。ヒジュラを元年とするイスラーム暦がいかに特殊かを、あわせて確認しておきたい。

問 5 正解① (フランスの王や王朝) 23

- ①P. 148 の¹を見て、13～14 世紀がイギリス・フランスの身分制議会の成立期にあたることを確認しよう。イギリスの議会は、王の専横を防ぐ意味合いが強いが、フランスのフィリップ 4 世は教皇権に挑戦する前提として、三部会を開き支持を得ようとした。
- ②③P. 227 の⁴で明らか。フランス革命後のブルボン復古王政は七月革命で崩壊し、同革命でルイ=フィリップが王位に就いた。
- ④P. 195 の図「宗教改革時の国際関係」で、フランソワ 1 世のライバルが、神聖ローマ皇帝位を争ったカルロス 1 世であることを確認しよう。

問 6 正解② (19・20 世紀の農業や農民) 24

- ①P. 220 の¹で、ティルジット条約に注目。プロイセンの人々は、ナポレオンのヨーロッパ征服過程で屈辱と亡国の危機を味わった。特に、ティルジット条約による領土の喪失は危機感をあおった。P. 357 の⁴⁷にフィヒテの愛国心を読み取ることができる。シュタイン・ハルデンベルクの「上からの改革」も、このような流れの中に位置しており、ドイツ統一の基礎力となった(P. 221 のチェック参照)。
- ②ロシア史で農奴制に関する事象は重要である。逃亡農民とコサックの関係(P. 204 用語解説)、アレクサンドル 2 世の農奴解放令(P. 233)についても想起したうえで、ミールについても確認しよう。P. 265 の用語解説にあるとおり、ミールの自治組織は強固で、ストルイピンも手を焼いた。農業の社会主義化の際も、かなり強制的な手段を用いて、ミールの自治機能が国家に吸収されていった。

③P. 234 の¹で、南北戦争中の出来事に注目。リンカンの出した奴隷解放宣言は、国内外の世論を味方につけるため、ホームステッド法は西部の開拓農民を優遇し、北部と結びつけるためのものである。両方が戦争中に出されているのは、偶然ではない。

④イギリスの選挙法改正については、P. 226 の²で整理できるが、あわせて流れも理解しておきたい。第1回選挙法改正は、産業革命による産業資本家の台頭を象徴するが、一方で、労働者の無視をも意味した。第2回改正で都市労働者に選挙権が認められるまでの間に、チャーティスト運動の波があることを想起してほしい。第一次世界大戦における女性の活躍を受けて、第4回改正(女性参政権)がある。

C

問7 正解③ (暦にかかわる出来事) 25

- a 『崇禎暦書』はイエズス会宣教師アダム=シャールによるもの。P. 173 の2で確認。
李時珍の『本草綱目』も『崇禎暦書』とともに明代の実学を代表する書物である。
P. 173 の3から、実学の発展にイエズス会が大きな役割を果たしたことがわかる。
- b モンゴル帝国はイスラーム世界の東半分を併呑したため、文化的にイスラーム的要素との関係が深い。P. 165 に載っている授時暦はその一つ。また、中国の陶磁器技法のうえにイランの絵付けの影響を受けている染付にも注目してみよう。

問8 正解③ (中華民国) 26

- ①これは中華人民共和国の時代。P. 296 の2を参照。朝鮮戦争の激化が、サンフランシスコ平和条約や日米安全保障条約の背景にあることを忘れてはならない。これについては P. 285 の流れ図も参照。
- ②これは清代。P. 248 の年表を参照。望厦条約と黄埔条約は、いわゆる不平等条約であり、虎門寨追加条約とリンクさせておきたい。
- ③辛亥革命に至る動きは P. 251 の5を見て、孫文と袁世凱の動きを追うのが必須。さらに、北京・南京・日本(東京)で起こった主な出来事を整理するのも、一つの方法である。
- ④P. 251 の5を見て、清による遅すぎる改革(光緒新政)と、孫文による三民主義の提唱が同時期にあたることを確認したい。

問9 正解① (プロレタリア文化大革命) 27

- ④の布告はレーニンが出したもののなので、とりあえず除外。
- ①～③は P. 294 で充分対応可能。大躍進の失敗、中ソ論争の本格化、中印国境紛争などを経て、政治的失点を取り返そうとする毛沢東が起こした「反撃」が、プロレタリア文化大革命である。このとき、毛沢東から資本主義の復活をはかる「実権派(走資派)」とレッテルを貼られた劉少奇や鄧小平は失脚に追い込まれ、若い世代の多くが紅衛兵を組織して毛沢東を支持した。しかし、周恩来と毛沢東の死を経て、中国は大転換に向かい、鄧小平が復活して、経済成長への道をひらいた。

第4問 歴史上の異文化接触

A

このリード文は、重要な要素を含んでいるので、じっくり読むに値する。

まず、P. 28～29 を見てほしい。唐とイスラーム帝国の間に活発な通商のある時代で、海上ではムスリム商人、シルクロード方面ではソグド人やウイグル人が活躍している。商品だけでなく、ゾロアスター教・マニ教などの伝播も確認しておきたい。ウイグル文字とソグド文字の関係については、折込⑧で確認できる。

ウイグル人などトルコ系民族の西遷については、P. 32～33 を見よう。トルキスタンの成立がわかり、ほぼ同時期にイスラームも浸透してカラハン朝が成立したことも確認できる。

リード文中にある遊牧民とオアシス定住民の関係については、P. 159 が参考になる。トルコ系民族のさらなる西遷については、P. 127 を見ておこう。

問1 正解③ (ウイグル) 28

ウイグルについては P. 121 に解説があるので確認しておこう。

- ①西遼はナイマンに王位を奪われ、そのナイマンはチンギス=ハンに滅ぼされた。モンゴル帝国の領土拡大過程は複雑なので、P. 162 を参考にしたい。
- ②P. 22～23 でエフタルの強勢を確認。ササン朝・グプタ朝に侵入している。6世紀は突厥が頭角を現す時期でもある。
- ③P. 28～29 でウイグル人の強勢と唐代中国の混乱(安史の乱)を確認したい。安史の乱の際のウイグルの援助は、中国と周辺民族の力関係を見るうえで重要な事件。
- ④③と同様に力関係を見るうえで重要なのが燕雲十六州の割譲である。P. 120 の地図[B]を見て確認しよう。この地域に現在の北京が含まれていたこともおさえておきたい。

問2 正解④ (世界史上の商業や交易) 29

- ①宋代の市舶司は P. 154 の地図[A]で確認できる。この時代は、北方・西方を契丹・金・西夏におさえられ、シルク=ロード方面の交易よりも海上交易、朝貢交易よりも民間交易が表に出る。

- ②P. 144 の地図[A]で，地図上の位置も確認しておこう。
- ③P. 172 で両商人の活躍を確認。国際交易に関しては，朝貢の形式・広州 1 港限定・公行による独占など，管理主義的側面が大きいので，対比して見るとよい。
- ④N A F T Aについては P. 292 の地図[A]で確認できるが，アメリカと社会主義のキューバが経済統合するということは論外だろう。

問 3 正解④（スンナ派イスラームのトルコ系王朝） 30

P. 126 を見て，イスラーム世界の変遷を地図で確認してほしい。その際，各地図の下にあるポイントも見っておこう。10 世紀のイスラーム世界がシーア派の台頭を特徴とするのに対して，11 世紀はスンナ派の回復を担うトルコ人の活躍が重要である。

B

問 4 正解③ (20 世紀のスペインの歴史) 31

スペイン内戦については P. 279 参照。

フランコ将軍が、ドイツ・イタリアの援助を受けていることを地図と図で確認しよう。イギリス・フランスは不干渉政策をとり、この後のミュンヘン会談(P. 280 の 1)でもこれを貫いたため、ソ連の不信感を高めた。一連の不干渉政策が、独ソ不侵条約やヒトラーの暴走を招いたことを想起したい。

なお、④は微妙なタイミングながら、19 世紀の出来事である。フロンティア消滅後のアメリカの太平洋進出については P. 259 の 2 で確認できる。実は、アメリカがフィリピンを得た 1898 年は極めて重要な時期である。P. 249 の「列強が獲得した租借地と主な鉄道」で、主要列強が中国に租借地を得た年を見てみよう。フィリピンに到達したが、中国市場への進出に遅れを感じたアメリカが、1899 年に門戸開放通牒を出すのである。

問 5 正解④ (ヨーロッパ中世における文化の交流や広まり) 32

①カール大帝の戴冠は、ローマ皇帝理念と強く結びついており、ラテン語文化のルネサンスもその流れで理解したい。P. 135 を読んでみよう。

②P. 150 の地図 A で確認できる基礎事項。よく見ると、イギリス・フランス・イタリアに比べて、ドイツ方面の大学設立の遅いことがわかる。

③これも P. 150 の 2, P. 151 で確認できる基礎事項。建築様式の変化の背景に、都市市民の経済力の上昇をとらえておきたい。

④これも基本。P. 150 の 1 に太字で記してある三つの騎士道物語・叙事詩をおさえることは必須。

問 6 正解② (ヨーロッパ中世の農民や手工業者) 33

a 荘園の仕組みは、中世ヨーロッパの骨格ともいえる。P. 137 に様々な側面から資料があるので見てほしい。なお、重量有輪犁や三圃制の導入に伴い、賦役の消滅に向かっていく。これも P. 137 の 3 で確認しよう。

b 同職ギルドに関しては P. 144 の 4 を参照。親方を中心に多くの職人や徒弟が集ま

り，相互扶助や技術伝承の役割を担った一方，製品生産のほとんどの過程に統制を加え，いわゆる資本主義的な自由経済の発展を阻害した。また，ギルドは都市の政治とも深く関わっており，ツンフト闘争を通じて市政参加への道を切り開いた。ただし，市民と認識されたのは親方層のみで，職人や徒弟は参政権を得られなかった。

C

ヒンドゥーとイスラームの融合に関しては、P. 181 の[3]・[4]に詳しいので、リード文を読みながら確認してみよう。ムガル帝国は、文化的な面にとどまらず、政治面でもヒンドゥー的伝統を尊重して、安定した支配をめざした。在地有力層であるザミンダールを徴税請負に利用したり(P. 181[2]参照)、アクバル帝がジズヤを廃止してヒンドゥー教徒との融和をはかったりしたのは、顕著な例といえる。

問 7 正解② (15・16 世紀の北インド) 34

ウルドゥー語は、リード文にも書かれている「融合」文化の例であり、P. 181 の[4]で確認したい。一方、タミル語は、北インドのヒンドゥー的またはイスラームの文化に対する、南インドの古い文化を代表する要素である。P. 99 のチェックを参照したい。

ムガル皇帝の中でまず注目すべきは、P. 181 の[2]に出ているアクバルとアウラングゼーブ。ジズヤを廃止してヒンドゥー教徒との融和をはかった前者と、ジズヤを復活して混乱と英仏の進出の契機をつくってしまった後者の対比は重要である。逆に言うと、アクバルのつくり出した安定状態を享受できたのがシャー=ジャハーンであり、彼がタージ=マハルを造営した。

問 8 正解① (15・16 世紀に起こった戦争) 35

このように時期を問われたときに、正確な解答をするためには、ばらばらに記憶してはいけない。各世紀の概観年表を使って、同時期に起こった出来事とリンクさせた方が、イメージとして残りやすい。

- ①P. 42 の概観年表に記載。
- ②P. 38 の概観年表に記載。
- ③P. 49 の概観年表に記載。
- ④P. 47 の概観年表に記載。

問 9 正解① (南インドの歴史) 36

a P. 180 の[1]に記載。これを 14 世紀の出来事と自信を持って記憶していた受験生は、少ないと思う。ただし、この王国がヒンドゥー国家であることは重要で、北イン

ドがデリー=スルタン朝支配下にイスラーム化していく時期に、南インドを支配したのだから、何となく 14 世紀前後なのはわかるだろうか。ちなみに、ヴィジャヤナガル王国成立以前に、南インドで強勢を誇ったのはチョーラ朝で、東南アジア遠征も行った (P. 35, 99, 180)。

- b** インド史の流れでとらえるならば、英仏の拠点獲得はアウラングゼーブ帝の時代前後から活発となる。P. 180 の¹を参照。ヨーロッパの視点から見ると P. 210 の¹。アンボイナ事件後、イギリスはインドに重心を移し、拠点を建設し始める。